

8. おわりに — 所感

1) 連雲港市について

市内観光に際し、外事弁公室友好城市処・陳珍文処長から最初に案内されたのが「港」であった。「新ユーラシア・ランドブリッジの東端都市」、「最初の沿海開放都市」、その故に、**22**年前、堺市と友好提携の縁が生れたことなど。

「連雲港市」の名前の由来を聞いて、堺市と同じく、「海の都市文明」にかける連雲港市の“思い”を強く感じた。「海州」を「連島」と併せて「新海連市」、さらに**50**年前、市の中心に位置し由緒ある「雲台山」を中央に据えて「連雲港市」。

「連島」に向けて**6.7** kmを一直線に伸びる「神州第一長堤」を見学した時、連雲港市における「連島」へのこだわりの具象として実感した。

この報告書を作成中に、連雲港市の歴史の象徴として感動を覚えていた「孔望山」について、幸運にも、「中国通信社」が、「仏教が、インドで誕生した後、西暦の初めに海から中国に伝わった可能性がある」と新事実の発見を伝える報道に巡りあった。

現場を、実地に見聞してきた直後のことだけに、正直に言って感動そのものであった。「中国通信社」の了解を得てその全文を私が撮った写真と共に報告書に織り込ませていただいた。

歴史先進国の一端を担う、連雲港市の文明・文化に触れる機会を得られたことは、計り知れない大きな収穫として充実感が残った。

2) 「徐福東渡」のテーマの意義

招待状（「中国徐福会」、「カン楡県人民政府」）、各氏挨拶（「徐福祭」開会式）、演劇「徐福東渡」（「徐福祭典」）、発表論文テーマ（「徐福学術国際研討会」）等から発信された多くは、その根底に、精神論として“徐福”テーマを中日韓三国の文化基盤の共通認識および交流推進の意義を説くテーゼとして位置づけ、提言・発信するものであった。

徐福が船出して「王」となって帰らなかった「平原広沢」とは、「日本」とであると言う大勢の考え方があり、このテーマは中国と韓国から日本に発せられた強いメッセージであると感じた。

特に、「徐福祭」の冒頭、開会のご挨拶で連雲港市徐福会・孫栄章会長（兼カン楡県人民政府書記）が、「徐福は、紀元前**210**年、中国の“河川文明”を“海洋文明”に転換していくきっかけをつくった」と述べられ、さらに、「船出して、その行く先は日本であり、文明を伝えた」と述べられたことは印象的だった。

「徐福学術国際研討会」において国務院発展研究中心副局長張雲方教授から、来年6月2日～6月6日にかけて、北京で開催予定の「**2006**年徐福国際研討会」計画草案が提示され、発表基準として、①新しい視野からの問題提起、②資料の新解釈、③新発見・新資料を揚げられ、今後において、さらに学術的に踏み込んだ議論の展開を進めて行かれることが説明された。

一方、今回同じ時期（**2005**年**10**月**2**日）、韓国・済州島で開催された「東アジア徐福文化国際学術大会」においては、国レベルでのイベントも含めて、「徐福は平和の使者か?」、「徐福は文化の伝達者か?」、「徐福と不老長生」、「総合討論」と踏み込んだ議論がなされたそうである。

今回、初めての参加ではあったが、「中国徐福会」会長に、日本語が堪能な劉智剛元駐大阪総領事（大使銜）が就任しておられることを知って一層の親しみを感じた。

名刺交換の際に、「堺はよく知っていますよ!」と、いきなり、流暢な日本語で言われた時には、「ニーハオ!」としか言えない私にとって、緊張感がほぐれる有り難いお言葉だった。

思わず、「佐賀県徐福会」の皆さんと共に、友好都市の「堺」からも発表に参りましたとご挨拶させていただき、はるばる来た甲斐があったと嬉しかった。

日本国内においては、考古学的な根拠から、「徐福伝説」に関わる議論は、伝承地を中心とし

た地域テーマとしての扱いに終始し、その変容に対する懸念を憂慮して全国的な議論の機会と場の設定に恵まれていない。

「徐福東渡」のテーマの意義は、東アジアにおいて「人をつなぐ」テーマであること、さらに、「Think globally , Act locally」の行動の理念に沿うものであると感じた。

3) 市民交流

(1) 家庭訪問

連雲港市と佐賀市の間で実施されている中学・高校生徒の短期交換留学制度のご縁で、佐賀市に來られ、村岡代表と旧知のお二人の家庭を訪問させていただく機会をつくっていただいた。

連雲港市では、市民の家庭に外国人が個人的に訪問することが許されようになったのは、佐賀市との交換留学制度がきっかけとなったと説明を受けた。

日本住宅公団の5階建て集合住宅といった感じであるが、その住宅地域内に入るには、施錠された入り口を通らなければならず、外部の者が自由には入れないようになっていた。

敷地内は、中国式庭園が作られ整備されていた。家の中は、比較的広く、ベランダに相当するところは、夫婦共働きが通常であるため、雨風に配慮して洗濯物干し場も兼ねたサンルームのようにガラス戸で囲まれていた。日本のように、入浴式の風呂はなくシャワーであった。

家の中の全体的な間取りは、私の知人のフランス人の家庭の雰囲気似ていて、寝室も含め家の間取りを案内してもらった姿に、個人の家庭生活に対する自信の表れが見えた。

(2) 市民交流

外事弁公室の通訳としてお世話になった馮 涛さんの卒業論文を読ませていただいた時、その内容と論理の視点に感心した。また、「徐福国際学術研究会」で発表後、お目にかかった徐廣影さんには、帰国後も報告書作成に対して色々とお助けいただき親交を深めた。

市民層において、日本への関心は高く、独自に、日本語を勉強している人がいることは当然としても、日本のアニメ・マンガや童謡、歌謡曲などが愛唱されていることは興味深かった。

カン楡県金山鎮人民政府張永信書記および蘇長曉鎮長の歓迎宴席では、佐賀県徐福会の皆さんとの旧知の間柄であったせいか、白酒（パイチュウ）の効き目も加わって打ち解けた雰囲気の中、日本式に全員で「北国の春」を含め日本の歌謡曲や童謡を合唱したのには驚いた。今度来る時は、日本の歌謡曲や童謡の歌詞の持参が必要だと盛り上がった。

昨年7月、我が家に、日本国・外務省アジア大洋州局の要請で、中国国家行政学院研修生二人をホームステイでお迎えしたが、彼らも「北国の春」を歌い、「一休さん」や「ドラエモン」の主題歌を歌って聞かせてくれた。

その時の説明が、現在の若者は、一人っ子政策の影響を受けて子供の頃から日本の子供文化に触れて育っており、「中国文化」と言えば、日本人が「京劇」や「太極拳」しか挙げないことに不満顔を示していたことを思い出した。

それは、戦後かなりの期間が過ぎても、欧米人から「日本文化」の代表として、「歌舞伎」、「フジヤマ」、「芸者」を挙げて興味を示され時、まだ、その程度の認識しか持たれていないのかと、現状を見てもらえない不愉快さを感じたことを思い出した。

相互に「心を通わせることが出来るもの」、それが、中国固有のことであっても、韓国固有のことであっても、また、日本固有のことであっても、それぞれの独自性を認めあった「文化」として共有することになると思う。

日本において「徐福」と言うテーマは伝説的であっても、そこに集い、語り合い、通わせる心は、「つながり」を実感させるものであり、その意味において、「徐福の精神に則って」と言うメッセージが発せられているものと感じた。